

日本西洋史学会第 61 回大会 発表論題・要旨

発表論題：ヨーロッパ聖杯騎士伝説とドイツ・バイロイトをめぐる歴史学的研究
—「ペルスヴァル」，「パルツィヴァール」そして「パルジファル」—

氏 名：川西孝男

発表要旨

本論はドイツ・バイロイト祝祭劇場で初演されたりヒャルト・ヴァーグナーの舞台神聖祝祭劇「パルジファルParsifal」(1882)にみられる聖杯騎士伝説が、実はバイロイト史に連綿と受け継がれてきたものであり、さらにヨーロッパの聖杯騎士伝説と歴史学的にも深い関わりがあったことに論及したものである。

“12世紀ルネサンス”の最中に創設されたバイロイトは、“アルプス以北のローマ”と呼ばれた司教座都市バンベルクとの深い関連によって十字軍騎士団の往来した都市であり、ヨーロッパ・キリスト教とアラブ・イスラム教世界の思想や文化が様々に交差した。そこにはトロワC. Troyes(1140-90頃)の「ペルスヴァル，聖杯物語Perceval ou le Conte du Graal」や、エッセンバッハW. Eschenbach(1160/80-1220頃)の「パルツィヴァールParzival」に描かれた“聖杯騎士の世界”があった。また、当時バイロイトを治めていたアンデクス・メランAndechs-Meran家はエルサレムとヨーロッパをつなぐ要衝の地を支配し、十字軍騎士団や聖杯騎士伝説と深く関わっていた。この聖杯騎士伝説は18世紀初頭のバイロイト辺境伯ゲオルク・ヴィルヘルムGeorg Wilhelm, Markgraf von Brandenburg-Bayreuth(1678-1726)によって理想都市ザンクト・ゲオルゲンSt. Georgen(1702)に現れたが、この辺境伯の生涯とザンクト・ゲオルゲンは「パルジファル」のストーリーをも髣髴させる上、英国の「アーサー王物語」といった聖杯伝説やガーター騎士団の影響を受けるなど、バイロイトには汎ヨーロッパ的な聖杯騎士伝説が歴史的に深く反映されていた。

この聖杯騎士伝説とバイロイトとの関連性に関する先行研究は、前述の3作品についての文学や宗教学的知見にとどまり、歴史学や地理学、あるいは文化融合の視点から検証したものは見当たらない。しかしながら、ヴァーグナーが辿り着いた晩年の境地であり、遺作となった“バイロイトの「パルジファル」”は、12世紀の2作品を十分に踏まえながら、現代の宗教的・民族的紛争や対立を超えた価値観を打ち出している。加えて聖杯騎士伝説の起源をアラビアやアフリカそしてアジア、といったヨーロッパ・キリスト教世界の圏外にも求めようとする今日の研究の方向性をも見据えたものであり、これらはナチス時代に主張された、ドイツそしてゲルマン民族の救世主、あるいは異教や異文化に対するキリスト教優位思想としてのパルジファル像とは全く異質だったのである。